

小作品での表現

高木茂行（聖雨）

Shigeyuki (Seiu) Takaki

小作品の制作は意外と難しい。何も考えず自然に書ければよいのだが、なかなかそうもいかない。あれこれ考えれば、ねらいが見えつまらないものになってしまう。この作品のように二文字だけのものならなおさらである。

見ていて飽きない作品というのはどうやら、技巧の上にある筆者の自然な姿が表れたものなのであろう。だから例えば、書を専門としていない芸術家、小説家、政治家などの書作品は、技巧的ではないがいいなど感じるものが多い。禅林墨跡が尊ばれる理由の一つにもそれがある（もちろん技術的に優れた作品も多い）。

理想を語っても、我々は書を専門としているのでそんなことは到底できない。否が応にも手に焼き付いた技が出てしまう。私の師、青山杉雨先生は禅林墨跡のよさを認めながら書をするものとして、「誤ってそのまま信奉すると、いわゆるアマチュアリズムになりかねない危険があり、故意に下手ぶって拙さを装って書くと鼻もちな

らないものになる。我々は専門家であるという自覚を持ち、人間性だけで芸術は成立しないということを経に銘する必要がある。」と言っている。開き直るようだが、我々は書を学び生きてきた姿を紙面につけるしかない。

この作品について解説することは、意図やねらいを認めることになり、前述のことと矛盾しているのだが一応解説する。全体的に、特に壽を左傾にすることで、紙面の中の文字の躍動感を求めた。鶴の一目目を強くあたって偶然に出た墨の飛沫は、その意図を後押ししたように思う。右下の遊印は、文字の勢いを紙面に留められばと捺したものである。筆遣いはやや側筆を用い、紙に突つかかた線で強い線を出せればと考えた。

【用具用材】

筆：兼毫筆 紙：台湾画仙紙 墨：固形墨



鶴
壽

68 × 35cm